

光円寺報

2010年9月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地 384

後藤明照、由美子(惟蓮)

T&F 0790-26-0162

メール kouenji_dayo

@nifty.com

<http://kouenji-hou.com/>

通信費年間1000円

よく聞いて欲しい

私たちは決して貧しくない

私たちは豊かだ

私たちは何も欲しくない

ダムも電気もお金も

あなた方は経済という宗教に

取り憑かれてしまった

神様はお金、儀式は開発

生け贄は地球

神様からの贈り物は

飢えと公害と戦争



のうねこ

仏教徒宣言(その八十一)

九月に入っても残暑と言うよりも、まだまだ酷暑・猛暑・炎暑・続きで、一昨日も京都の田辺市で三十九・九度という、この夏一番の最高気温を記録したそうです。そんな中「暑いですね」の挨拶が合言葉のようになってしまっています。でも、夜中の虫の鳴き声の大きさ・力強さや、早朝に流れる風の涼しさに季節の移ろいを感じます。

移ろい・変化・流動・流転・・・すべての「もの」は変わり続けている。諸行無常だと仏教は教えます。そして、私たちも「それは、そうだ」と肯いて、納得しているはずですが、でも、自分の思いを超えた現状の変化(病気や怪我や事故や災難・災害)に出会うと、納得していた「つもり」だったことを、そんな出来事から突きつけられます。だから「何故、私だけが、こんな目に会うのか? 遭わなければならないのか?」と。現実を受け入れることが容易ではない思いが、私を覆うのです。しかし、悲しみ、もがき、苦しみを通してその事を受け入れざるを得なくなるのも、私に起こって来る事実ではないでしょうか。そんな、「はたらき」が私に起こるといふ事です。

ところで、私たちが宗祖とする親鸞聖人はこのような事をどう受け止めて行かれたのでしょうか。親鸞さんは一一七三年、今から八三七年前に生まれ、一二六二年、九十歳で生涯を閉じられました。この九十年の生涯は決して順風満帆、誰もが羨むようなものではなかったのです。父親は日野有範で身分の低い公家だったといわれ、母親は当時、平氏の一門が栄華を極めていた中、源氏の流れをくむ吉光女(きっこうにょ)だと言われています。その母親とは幼少の時に分かれ、

九歳で出家得度されています。そして比叡山で二十年間の修行の末、仏道の歩みを「ただ念仏」を説かれた法然さんとの出遇いに求め、比叡山を下り、吉水の法然さんの元へ行かれます。それが親鸞さん、二十九歳の時でした。その後三十五歳の時に「念仏弾圧」といわれる承元の法難によって越後に流罪になります。そして三十九歳で流罪が許されその後、関東に行き二十年ほど過ごして六十歳ごろに京都に帰り九十歳で亡くなられた。これが大まかな親鸞さんの一生涯です。

自分の人生を受け止めて生きて行かれた、その基に在るのが、法然さんとの出遇いで戴かれた「本願念仏」の教えです。その感動を親鸞さんは「たとい、法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。」と言い切られています。ここに念仏の仏道に生きる覚悟が語られています。「法然さんにだまされて地獄に落ちても後悔しない」と。「地獄に落ちる」これは、最も条件の悪いことになっても構わない。自分の状態が最悪と思われるようになって後悔しないということでしょう。後悔しないとは、ああしたら良かったのに、こうしとけば良かったかも…と思う必要がないことでしょう。親鸞さんをしてそこまで言わしめる「念仏申す」と言うことは、自分の思い入れを混ぜ込んで言うところの念仏ではないということです。

それは、「南無阿弥陀仏」の名号にまでなった如来のはたらきだからでしょう。その阿弥陀仏に従って南無しながら生きる。それが「念仏往生」なのではないでしょうか。それは、自分一人だけの救いではなく凡ての人・衆生と共にという阿弥陀仏の本願に生かされる道だからです。そこに立つがゆえに「地獄におちたりとも後悔すべからず」なのでしょう。

南無阿弥陀仏

釈明照

仏事ミニメモ

葬儀(そうぎ)

「真宗会館」冊子より

本来、浄土真宗の葬儀式は、まず自宅のお内仏(お仏壇)の前で出棺の勤行を行ったのち、参列者が行列を組んで葬場へ向かい(これを野辺送りといいます)、そこで葬場のお勤めをしました。そして、最後のお別れのち火葬したものです。

しかし、今日では、出棺の勤行と葬場の勤行とを同じ式場で、時刻を定めて(例えば、「葬儀・告別式〇時〇時」というふう)につけて行う「告別式」形式が一般的になっています。

社葬などの大規模な葬儀では、先に葬儀を営み、別に日時を定めて告別式を行うこともあるようです。告別式は、文字どおり故人にお別れを告げる儀式といえましょう。

葬儀に参列しますと、「ご冥福をお祈りします」とか「安らかに眠りください」という言葉をよく耳にします。身近な人の死を、冥福(死後の幸福)を祈ること、あるいは安らかに眠らせることで、本当に亡き人に応えることになるのでしょうか。

浄土真宗の葬儀は、葬儀に参列した一人ひとり、生きる意味を仏様の教えに問いたずね、真実の教えにあう仏事です。仏様の大きないのちのはたらきを依り所として、生まれた事の意味を感得し、生きていくことに心から喜べる生活こそが亡き人に応える事なのです。

さて、いよいよ葬儀の時間がせまってきました。葬儀の次第について簡略に申しますと、

- 1 遺族・親戚・参列者着座
- 2 導師(住職)入場
- 3 開式の辞・総礼
- 4 勤行
- 5 総礼・閉式の辞
- 6 導師退場

という形になります。

4の勤行の間に、導師の焼香・表白、弔辞等があります。勤行中、喪主・遺族・近親者・遠縁の順に焼香を行います。一般会葬者の焼香は、喪主・遺族等につづいて行うか、別の焼香台で行います。お参りには数珠を忘れないようにしましょう。